

## 今月のブンゴ

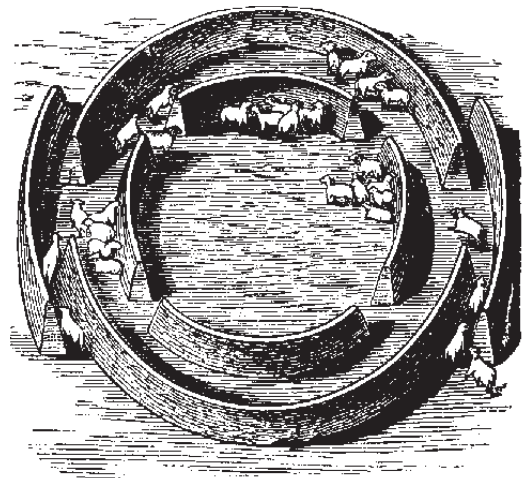
古山恵一郎

古本屋で「左伝」を買ってきた。「春秋左氏傳校本」全三十巻が和綴じの15分冊になった明治15年の刊本である。紙虫少々有るも極めてきれいな状態を保っている。ということは無茶苦茶な読み方をされた本ではないということで、積ん読用最適品。床脇の書院棚などにぴったりの「インテリア小物」である。これがなんと田舎の古本屋の棚の上に6000円の値札が付いておった。一冊400円である。小僧共が隠し持っているオシリとオッパイの古雑誌より安い。我が国の伝統的な知的エリートが絶滅寸前であることがよく解る。買ってきたは良いが、チンプンカンプンなので、そのまま本棚に積んである。その代わりに平凡社の東洋文庫から「四書五経」を買ってきて、ちびちびと読み始めた。3000年前のことを書いた2500年前の本を徹に入り細に涉って一字一句解釈して社会を組み立てようという人々がついこの間まで居たのであるから、これこそ保守主義の極みであろう。そういう意味では参考になる。四書五経成立当時、農業技術の変化も今に比べれば、遥かにのんびりしたものだったであろう。ふと思うのは、そのころの中国の人口はどの位だったのだろうということ。そうした「超保守主義」が息をながらえて来たのも、水稻耕作が唯一の持続可能な農業形態だった。という訳だが、これも不思議な偶然だ。6000年前の穀倉地帯で、今も農業が行われているのは揚子江流域くらいのもだろう。

現在の東アジアに「米食う人々」というのは一体どの位居るのだろう。中華人民共和国が進めてい

る三峡ダム計画も、米食う人口を増やすに違いない。そしてどうもこの「米食う人々」には共通項があるように思える。20数年前、朴正熙軍事政権下のソウルには「粉食センター」と称する多分は公的機関のバックアップによる、うどん、パン、饅頭、お好み焼などあらゆる粉食を揃えた大型食堂があり、毎月「粉食の日」というのを定めて国民揃って米のめしを食わないことにし、戦時意識を高めていた。飽食の国、我が国ではつい数年前、「新米が足らぬ」ということで、パニックがおき、「米が足りる」というのが、単なる食糧事情等ではなく、中国6000年の米食う伝統に従った国家経営上の最重要事項なのだと思います。

パンはあくまでも「代用食」であり、外国から輸入される米はどこまで行っても「代用米」なのだ。自動車を売りたい商人達が身代わりに輸入させようというカリフォルニア米も所詮は「おいしい代用米」となるのは目に見えている。すでにアラレ、お煎餅、ピラフ、チャーハンで「おいしい代用米」に馴らされ切っている我々と違い、お隣の韓国には、見た目にはそれと分からねども、中国6000年の米食う伝統に則って正しく生きる「隠れ両班」が結構多いのではないかと思う。近代化と同時に「トリ・ケモノ」と化してしまった我々と違い、韓国語では敬語、謙讓語が人の道の第一歩である。敬語、謙讓語で首を傾げてしまう。我々の様な禽獣の類に較ぶれば、1000年前の日本人は遥かに韓国語の習得も楽だったと想像する。敬語、謙讓語の次は文語である。イ・スニちゃんのラブソングなどを見ると、どうも分からないのは、歌詞がどうも文語しちゃう傾向にあるらしいのだ。恋愛一真剣一文語という連鎖反応なのであろう。「トリ・ケモノ」化していない彼の国の若者達はいざ真剣、となると、途端に中国6000年の米食う伝統に則って正しい男女関係に陥ってしまうの



CONCENTRIC SHEEP SHELTER / "Barns, Sheds & Outbuildings"  
Alan C. Hood & Company, Inc. Original Edition - 1881

だね。こうした若者から見れば、信じてもないキリスト教の儀式に則って結婚式を上げよう、なんてえ我が国の若輩どもは「トリ・ケモノ」以外には見えないであろう。そしてこの中国6000年の米食う伝統に則った「正しい男女関係」というヤツがこれまた当時の「女は家畜の一種」みたいな社会制度を「正統」としているもんだから、結構大変そうで、交際交流でおつきあいする韓国の中年建築士諸氏（中年男を野放しにしてはならんということか、数年前から夫人同伴であります）、に私はつい同情してしまうのであります。

今月も巻頭が散漫で恥じております。誰か交代で書いてくれることを強く望むものであります。特に植民的トンネル事故の話なんか、よろしいのではないかと思うのですが。植民地と申せばここ浜松も同様で、建築士会が乱開発の尻拭きを手伝っている住宅団地では先日、NHKがロケをやっていました。「どうして浜松へ。」と聞くと「全国を探したら、ちょうどよい場所がここ、奈良県と、沖縄だったので近いところ。」という返事。記者会見用の資料が置いてあったのでそっと見てみると、「開発が進まず、荒涼としたニュータウンの片隅に、へばりつくように暮らすふたつの歪んだ家族、・・・」という出だしだった。

(こやまけいいちろう／ASK Inc.／浜松)



## インドア・シーズンに 永田温子

3月に一段落つくもの=子供。その上の子にわが家産のセーターをほしいと言われて、とりあえず、父親用に編んでいた、子供には少しだぶだぶの、わが羊毛種全てが入っている3色セーターが渡りました。私は一言で言えば、認めてもらえて『うれしい!』。

時折、自分のあとの持ち時間を考えてみます。勿論、どんな長さも確証はないわけですが、その間にま

に合うように、見られることに耐えるだけのセーターを2枚編んで残したいと思っています。多分誰でも、去っていった家族の思い出としての「もの」を大切にしていると思いますが、セーターをそんな感じのものにしたいのです。羊の毛刈りが年1回なので、まず、その原毛を手に入れるのに1年、洗毛後、子供が2~30年は持つものとして、念には念を入れて双糸に紡ぐのに、1着分1か月、デザインを決めて編むのに3、4か月くらいかけるかもしれません。実際にはこれくらいの手間暇ですが、編もう編もうと考えていて、『さあ、これできこう』となるまでにしばらく時間が必要です。それはもっぱら、私が”若葉マークのニッター”であるという理由によるのですけれど。たかがセーターですが、されどセーターです。

このごろはわが家の原毛でも、材質がつややかで柔らかいコリデール系(デリー)、可塑性に富むサフォーク系(さっちゃん)と固めのブラックフェイス系(けんちゃん系)というような違いを、必要に応じて使い分けるようになって来ました。たとえば動きの優しい人には前者、働き者の男性のセーターや上着用の布地には後者という風に。それに、一度編んだセーターをほどこ直すということもするようになって、自分でも驚いています。衣類の着捨てはもう長い間の習性になってしまっていて、なかなか前に着たものを次に生かすということではできていなかったからです。本当はそんなにはいらなかった、少しのものを大事に着て、最後までそれを生かし切るのがシンプルでいいなあと、近頃になって思っていたりするのです。

それには・・・去年の秋、レアーシープ協会の総会が開かれて、女満別、本間邸の工房で見せてもらった裂き織りの機と、できあがった衣類の数々! 工房で飼われている、4本角・茶系のマンクスロフタン、これがレアーなシープなのですが、この毛の風合いを生かしたセーターもさることながら、一度ほどこいて、裂かれて、改めて布に織られて、新しい服や帽子へ変身した昔の、前の衣類! わが家の羊と、このやり方を合わせて、持ち時間と天秤にかけながら自前の衣に迫っていくのも良さそうです。

今すでにまぶしい日差し。なのに周りはまだまだ分厚い雪の層。外へ外へと気持ちは向きますが、屋内にもうしばらく留まらざるをえません。ちょうど山羊が出産する5月連休明け、春の外仕事が始まるまで。でも、これを中の季節として活用しない手はないですね。

(ながたはるこ／小別沢・山羊<sup>2</sup>クラブ／札幌)

## 街でひつじと暮らすには・3

### 片桐つくね

どんな人でもナニカ、異性同性血縁友人愛人牛馬犬猫金魚蟻螂等々、と暮らしたことがあるはずだ。動物とは限らない。麦酒が好きな人は湯上がりの朋としてるだろうし、スキーヤーは輝く急斜面や大波のような雪原と、漁師さんは網船魚群と、海、と暮らしているだろう。自分の心の領域をあるものあることのために明け渡し、愛し憎み、利用し搾取し、吸い取られて悩まされてそれでも止められないのが、暮らす、だと思ふ。と、いうわけでひつじとの暮らしは「苦悩と我慢」だってあり。今のニッポンの街でスルには、街を変えていくチカラと情熱も必要だろう。それでもやりたいのだから「粋・狂」の極み。頭の中で想像するだけで、わくわくする（ほらもう、ひつじと暮らしてる）。ひつじとはいったいどんな生き物なんだろう。蹄が二股になっている偶蹄動物。胃袋は、堅い植物の繊維を分解してくれる小さい生物が住んでいる大きなタンクのようなもの、噛み返しに役立つもの、鶏の砂肝のように頑丈なもの、普通のものど4つある。上の前歯がないが柔らかく動く上唇を持ち、食べた草をもう一度口の中に戻してもぐもぐ噛み返す「反芻」をする。世界の各地方で気候環境や人間の利用目的やにあったひつじの改良が数千年かけて進んだ。極寒の地、乾燥した砂漠地帯や急斜面、岩山や高地そのうえ草が全くない離島にまで適応させ、用途別の羊毛乳を産し、うんこは厩肥や燃料、死んでしまっても皮革肉脂肪蔵骨や、流産してしまった胎児まで、全く捨てるどころがない、まさに LIVE STOCK=生きた備蓄、家畜である。最初にひつじを宝としたのは、四大文明が興った地方。文明の名の下にヒトが木を切りつくし土地から絞れるだけ絞り取って後に何も残らなくなったような煉瓦砂漠や、爆発的に増えた人口のため耕作に不適な湿草高原地帯に追いやられたヒト達の間で、食べるもの、着るもの、住むもの、そして軽い体重と優しいふたまたの足、土をよみがえらせることができる厩肥を、ペンペン草から産む、水の要求量も少ないひつじは、どんなに貴重な動物だったのだろう。ところが日本の家畜史では明治時代までひつじはいない。縄文時代は犬だけ、大和朝廷の時代に牛馬が大陸からやってきて定着したらしいが、穏やかな気候と多様な森、滋味豊かな土と山川海に、つまり衣食住に恵

まれた日本にはひつじは全く必要がなかった。それで現在、日本に「合う」ひつじは全くいない。それなのにひつじが欲しいのは、日本が砂漠になっちゃったから？

(かたぎりつくね / 獣医師 / 札幌)

## 隣んちの鳥日記 パート2

### 北尾久美子

毎日、降り続く雪と鳥のいる景色を、ボーっとながめて暮らしています。気が付くと、生活のテンポもゆっくりになり、仕事をする気が全然おきない、もう2ヶ月が過ぎているのに、ちょっとこまってしまふ、はあ～。

"チッチッチ".... 小さな地鳴きの声に混じって "ツツピーツツピー" のびやかな囀りの声が聞こえてくる。遠くでキツツキのドラミングが乾いた音を響かせる。日射しが、においが、なんだか春めいて来た。我が家のバードテーブルには、たくさんの常連客がやって来ます。一番多いのはカラ類。ヤマガラ、コガラ、ハシブトカラ、シジュウカラ、ゴジュウカラが混群となって飛び回っている。甲高い声のヒヨドリ、鳴きマネのカケス、赤、白、黒のコントラストが美しいアカゲラ。皆、一年中この山に住んでいる留鳥です。そして、いつからか、元気者のエゾリスが姿を見せるようになってきた。ピンと立った耳、揺れるシッポ、目まぐるしく動きながら、細い枝、ツル、太い幹、ほとんど地面に降りずに、みごとな速さで枝渡りをしてやって来る。小鳥用のバードフィーダー(木の枝につり下げている筒状のえさ入れ、ヒマワリの種が入っている)の小さな穴に無理矢理大きな顔を入れようとしてもがいている。しまいには入口に噛みついて歯型でボロボロにしてしまう。まるで砂時計の砂が落ちるように、みるみる、バードフィーダーの種が減っていくのです。エゾリスは早起きだ。夏の間は1日中活動するが冬場は朝薄明るくなると動き出して、昼前にもう巣に帰る、という暮らしをしているらしい。どうりで、朝寝坊をした日には逢えないはずだ。好物のくるみをそっと置いておく。目ざとく見つけたリスは、カプツと口に啜えたまま、一目散に山へ帰っていった。これからゆっくり、長いお昼寝でもするのか？

冬の朝、雪の上にはたくさんの足跡が残っている。真直に伸びる一本道は、どうやらキツネのようだ。



かんじきをはいてアニマルトレッキング、足跡を追いかけてみる。木々の間をぬけ、小さな沢伝いに行く。ここで誰かと交差した後、立ち止まった、ピョンとはねた、ネズミでも見つけたのかな？!

誰もいない雪原を歩いてゆくと、心地よい疲れと、ふっと迷子になりそうな不安が....ふり返って、やけに大きな、自分の足跡をたどって家に帰りつ

いた。  
ある夜、ふと窓を開けると星がいつもより澄んで輝いている。外気温、マイナス12度、キーンと張りつめた空気が部屋の中に流れ込む"ほんとにここは静かだな~"と思った時、あれ?! かすかな物音、カサッソ、何かが動く気配がする。雪明りの中、よく目をこらして見ると、バードテーブルの中から、フサフサした、黄金色のシッポがたれ下がっている。こっちを向いた、目がキラッと光っている。"テンだ!! テンが来たんだ。あの足跡はやっぱりテンだったんだ"胸が高鳴ってくる、あわてて、寝入ったばかりの相棒を揺り起こす。ねばけまなこと興奮しきった目で、家の中は大さわぎ。そんなことには気にもとめず、テンはするりと雪原をかけぬけて行った。夜更けに隣から寝言のようなつぶやき、"あれってオヤテンかな?"ん?! なんだ、マージャンの夢じゃないんだ、そうだねオヤテンかな、コテンかな....。

(きたおくみこ/バードカービング作家

スタジオ ZERO 主宰/札幌)



KITAO KUMIKO

#### ゴジュウカラ

スズメサイズの灰青色の鳥。幹に垂直にとまり、逆さになって歩くことができる。

## ものけん

## もの環境研究会

### ■研究会レポート1

「北欧のかたちの現在」1995年11月17日夜  
講師の一人、伊藤さんのレポート

### デニッシュ・デザイン/伊藤千織

(あらすじ: 92年から94年まで、デンマークの王立アカデミーという偉そうな名前の建築学校の家具科で、ビールの飲み方とぐうたらとデザインを学ぶ。)

私がデンマークを留学の先として選んだ理由には、もちろんデニッシュ・グッドデザイン自体に対する憧れもあったけれど、それらを生み出す社会背景や考え方や人々って何なんだろう、という「？」の答えを知りたかったからだった。そこで私が出会ったひとびとは、昼からビールをラッパ飲みする、らくちんとおしゃべりが大好きな権威嫌いのリアリストたちであった。(実際私がアカデミーで最初に学んだことは、栓抜きなしでビールの栓を明ける方法だった。)"きもちいい"状態と空間に敏感で、全く肩ひじ張っていない。なんか、デザインと似ているぞ。

スカンジナビア/デニッシュ・デザインといえば、ご存じのとおりシンプル・モダン・機能的の三拍子。実際、デンマークの「今」においては、かつてのような伝統的なクラフトマンシップを強く感じさせるデザインからは様変わりしてきているが、それでも共通して流れる考え方の伝統というべきものがある。

デンマークの建築家やデザイナーがとにかくとにかく、合言葉のように口にするこぼがある。"プロブレム・ソルヴィング(問題を解決すること)"と"プロセスが大切"ということ。今ある問題をより良くするためにどのような新しい提案ができるか模索することであり、それらを実現させるためのプロセスである。問題といっても必ずしも深刻なものではない。テーマとでもいったらいいだろうか。たとえば、目にやさしいあかりとは?誰もと同じように快適に座れるテーブルのかたちは?誰にでもわかる表示のしかたは?そうやってみれば、生活を快適にするために解決すべき問題はそれこそ無限に転がっている。問題をみつけるためには、正しく等身大に現状を生活を見つめる目が必要になる。表層の美醜や意匠を云々することよりも、まずむしろそちらの方が重要なことなのだ。

そして、そのテーマを実現するためのプロセスは

例えて言うなら彫刻のようなものだ。試行錯誤を繰り返し、ある塊から余分なものを極限まで削ぎ落とし、そこから現れる機能と抽象の形態＝シンプルさに美を見いだす。その過程において、ときには物の在り方・構造やシステム自体を作り替えることも必要になる。そういう作業をゆーっくりじっくり時間をかけて、この国の人々はやっているのだ。

だから、都市計画から注射器に至るまでほとんどのデンマークのデザインは、設計者・製作者の問題に対するなんらかの答えがかなり現実的に、しかも実験的に形になったものといえる。モノや空間は自体は声高に主張しないけれど、注意深く見てみれば使ってみればその主張は控えめにしかも明確に伝わってくるはずだ。

ここに述べたことは、実は特別なことでもデンマークに限ったこともなくて、いってみれば非常に良識的であったりまえのことだと思っただけけれど、日本のモノのデザインの多くが、いまだにレイモンド・ローウィーの時代とたいして変わらず、消費にのった「スタイリング」から抜け出していないという現状を目の当たりにすると、なんだかやりきれなくなってしまうのだ。

と、いまだにどこか浦島太郎でいる私は思ってしまうのだ。 (ちょっとまじめになってしまいました。)

・・・

もしデンマークへ行くことがあったらすべきこと

- 運河べりで日なたぼっこしながらビール。
- 街角のスタンドでソーセージ立ち食い。
- 公共デザインに注目 (空港・駅・バス停・銀行ほか)。
- ルイジアナ美術館へ行って一日ぐだぐだする。
- チボリのジェットコースターと観覧車にのる (夜もゲー)。
- せかせか歩かない。
- 人魚像には行かなくてもよろし。(ちなみに人魚のモデルは岡田真澄のおばさんだそうです。)

(いとうちおり／デザイナー／札幌)

## ■研究会レポート 2

「バウハウスとスキー!？」

2月2 (金) ~ 3日 (土)

ニセコ/ロッジ・ハイクローツ、ひらふスキー場

1月19日 (金) 夜、ファニチャーデザイン・ナツカでの新年会のしまいにスキーに行こうというこ

とになって、滑るより温泉がいいやという希望もいれ、酒飲んだその場の雰囲気とメンバーをほぼ持ち越す形でニセコ行き。参加者10人。ものけんで行くのだからオベンキョウもせなあかん、で、前田さんに無理言ってスライドとおしゃべりをお願いした次第。

## ブルグギービヘンシュタイン／前田英伸

ものけんスキーツアーの余興として、昨年暮れにドイツに行ってきたときのスライドを見ていただきました。旧東側のザクセン・アンハルト州文部省の主催した、日独学術大会という何やらいかめしい名前の催しの一環として、ハレという街にあるブルグギービヘンシュタイン (18世紀のお城をキャンパスにしている美術大学。バウハウスとの縁も深く、ワイマール時代バウハウスの陶器工房の教師だったゲルハルト・マルクスが学長をしていた事もあり、デッサウに近いことから、2つの学校は兄弟のような関係であったとは学長の話。) の陶磁器学科からの招きで、九州にいた頃お世話になった方々と神戸芸工大の長井さん、僕を含め6名が日本側からの参加でした。

スライドはベルリンのブローナムミュージアム (近代の工芸品のコレクション) とバウハウス・アーカイブ (建物の設計は後で良く見てみると、ワルター・グロピウスのものでした。誰のしか分からないなどと言ってしまっただごめんなさい。)、開会式が行なわれたヴェルニゲローデの街、ハレのブルグギービヘンシュタインの各工房、それと最後にチェコとの国境沿いのゼルブという街にあるドイツ陶磁器博物館と、旅行中に撮ってきたものを長々とやってみました。個人的には、統一から丸5年目で、まだ解決しなければならないたくさんある事を抱えているドイツの人々の姿と、マイスター制につながるしっかりした教育に対する思想、陶磁器産業が将来的に縮小を迫られている時期にも関わらず、だからこそ資料を後世に残す必要があるとの考えから長期に渡って特色のある博物館を創ってゆこうとする姿勢など、デザインを学ぶ人間として改めて考えさせられる事多い旅行でした。取り留めのない話で、聞いていただいた方々にはご迷惑をおかけした事と思います。まあともあれ、あくまでスライドはおまけのようなものでメインはおいしいワインと料理、雪秩父の温泉とニセコの上質の雪、それと近くから駆けつけていただいた沢田さんのテレマークでの滑走とラム工房を見学させていただいた事でした。

(まえだひでのぶ／札幌市立高専助教授／札幌)

1シーズン1度ずつのワークショップも2年目をむかえました。1月にはじめて8時間ワークをやってみました。時間はゆっくり流れながら一瞬のようでもあり、深いやすらぎと新しく湧き上がるエネルギーを共有することができました。今年はこちらで行こうときめました。それから、今年「声」にフォーカスしてみようと思います。声はほんとに不思議で面白くパワフルです。他の方法と組み合わせたり、いろいろな使い方をみなさんと一緒に試して遊んでみましょう。すでに御自分の方法を確立していらっしゃる方々も、異和感なく、たちまちとけ合って楽しんでいただけたらと思います

す。どうぞ気軽に御出かけ下さい。

春：4/7(日) 1時～9時、夏：7/7(日) 1時～9時

会場：新宿京王プラザホテル南館10階1055室

会費：各回2万円(春夏申し込みの場合は3万8000円)  
御予約後下記口座にお振り込み下さい。

第一勧銀多摩桜ヶ丘支店(普)1410336 山崎愛子  
口座

お夕食にはMON特製のお弁当を用意します。

8時からTea Timeです。パフォーマンス歓迎。楽器の持ち込みも自由です。

申込先：TEL0463-76-8073 FAX0463-76-8615

山崎愛子/秦野市北矢名176-15 〒257

※個人セッションは山崎宅(小田急線東海大学駅下車7分)で水曜日を除く12:

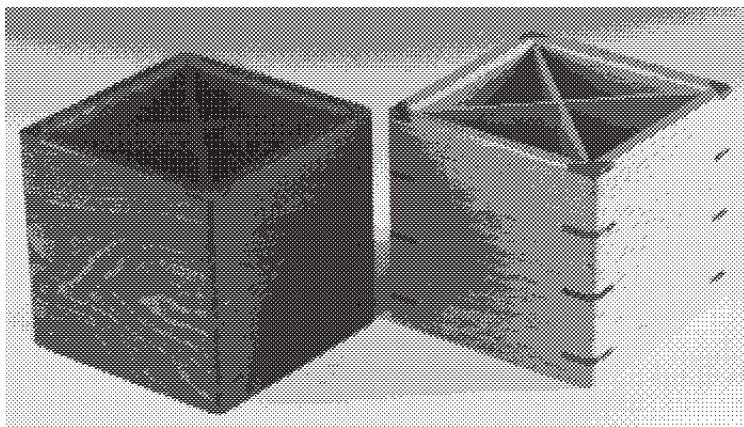
## 連載広告<その1>

いつも工房だよりを楽しみに拝見しています。今回から、シリーズで私が作っている品物をご紹介させて頂きたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

木で物を作るという仕事を始めて十五年ほどたちます。本人は特にこだわっている訳ではないのですが、『箱』の仕事が多いようです。この仕事を始めるきっかけとなったのが、道立近代美術館で1981年に開催された「あそびの木箱」展だったので、それ以来なんとなく『箱』を作り続けてきました。箱というと、その中に何かものを入れるのではなくとも「思い」とか「時間」とかが入っていてもいい訳です。「箱の中は宇宙である」という言い方もありま

すけどそうかもしれないとこのごろ感じています。このペン立ては私がモノ作りを始めた頃から作っています。四隅を留組(45°に切り、張り合わせる)みにして、補強とアクセントをかねて、カリン材の雇核(やといザネ)を入れてあります。オリジナルデザインは現在匠工芸の常務・中井さんです。中央に×印の中仕切りを入れ、シンプルであきのこないグッドデザインになっていると思います。長さ400mm弱、厚さ8mmの板から95mmの長さ

に切った板4枚を作ります。切るとき、あと



で木目がつながるように順番を狂わせないように並べます。各々の板の両端を45°に切り揃え、紙テープでつないだあと切り口を木工ボンドを塗って組み立て、麻ひもでグルグル巻にして、締めて固めます。一日ほど放置してひもをほどき、2.8厚の丸のこで、16か所切り込みを入れて、別に作っ

ておいたカリン材の雇核をボンドをつけながら入れていきます。数時間おいて、乾いたら、サネのはみ出た部分を丸のこで切り落とし、ベルトサンダーで仕上げた後、四隅の丸面をハンドルーターでとり、そのあとサンダーで面をととのえます。上・下の縁は糸面を紙ヤスリでとって出来上がりです。塗装は現在はアミノアルキッド樹脂を吹付けしています

が、近々、オイル仕上げに変えようと思っています。

ペン立・PS-1(サイズ：巾90×長さ95×高さ90mm) ¥3,500(材、加工) ¥4,000(仕上げ)

クラフト&デザイン タンノ 丹野則夫  
〒079 旭川市永山9条3丁目1-19  
Tel. & Fax. 0166-47-3895



# I am Dulciman.

小松崎健

こんにちわ、はじめまして。資源節約のため、ちらしのウラに書いてます。工房だよりはいつも楽しく読ませてもらっています。今日は、僕がいつも考えてる音楽のことなど書かせてもらおうと思います。

みな様は、ハンマーダルシマという楽器をご存じでしょうか。台形のうすい箱の上に弦が数十本。それを両手にもったバチでたたいて演奏する、ペルシャ起源の楽器。

それがハンマーダルシマです。音色はやさしく幻想的で、その音に聞きほれた天使が思わず地上に落ちてしまったというほどです。(僕が考えました。)

僕はこのハンマーダルシマの演奏者です。日本にはなじみの少ないこの楽器を弾いているおかげで、けっこうあちこちによばれて演奏活動をしています。10年ほど前、CD、ビデオなどでこの楽器を知り、すっ

かりとりこになってしまいました。どこに売ってるかもわからなかったので、自分で手作りし、演奏をはじめました。単純な構造の楽器ですので、なんとなく、それなりのものが作れました。今使っているのは、アメリカシアトルにあるダスティストリング社製のものです。自作のものは、チューニングが狂いやすいので今は使っていません。

ハンマーダルシマはアイルランド系アメリカ人の間でよく演奏されます。特に、アメリカ南部、アパラチア山脈地域の音楽によく登場します。僕は学生時代から、アパラチアあたりの音(オールドタイム、ブルーグラスなどとよばれる音楽)がとても好きで、バンジョーやフィドル(バイオリンの俗称)を弾いてました。「大草原の小さな家」のお父さんが演奏してるような音楽です言ってみれば本当の意味でのフォークミュージックです(拓郎や松山千春じゃなくて)。以来、世界各地の伝統音楽(トラディショナルミュージック)、フォークミュージックに興味をもつようになりました。そ

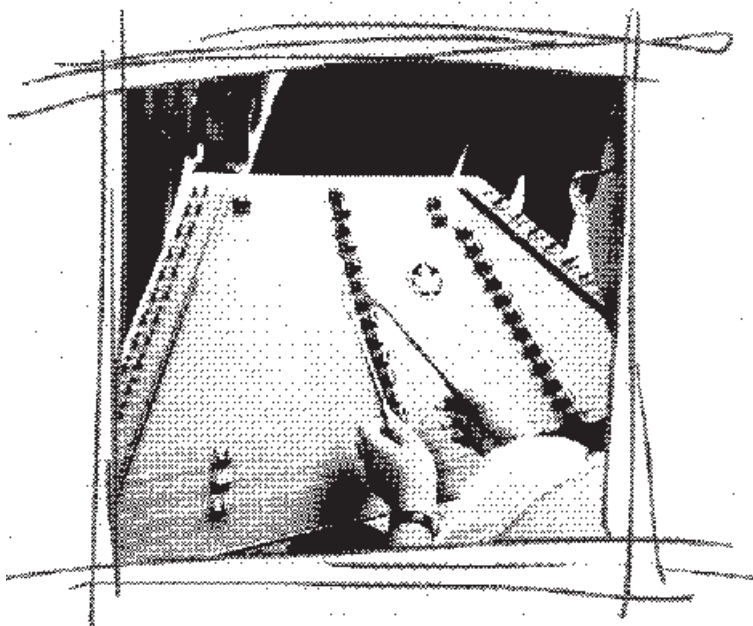
れは、自己主張の音楽ではなく、芸術音楽でもありません。何かを表現するために存在するものではないのです。「音楽をやってます。」なんて言うと、「ホホー」と言う反応がかえってきます。この「ホホー」がくせものです。「ホホー」のなかには、自分とは違う世界にすむ人を見る感情が含まれているような気がします。

今の日本に欠落しているもの。それはフォークミュージックです。日本で音楽を続けるためには、「お父さんにも弾けるピアノ教室」に通うとか、昔の仲間と、「おじさんビートルズコピーバンド」

を結成しちゃうとか、あとはプロになるという手ぐらいでしょう。生活の中でごく自然に楽器に親しむ。そうしたいんだけど、そんな音楽があまりみあたりません。アメリカを旅行した時おとずれたミュージックフェスティバルで、バンジョーをかついだ女の子や、年寄りのフィドラーの演奏に聞き入る若者をたくさん見ました。本当にい

いなあとあったんです。三味線もった高校生って、あまり見かけないから。そんなことを考えながらいつも音楽をやってます。

今年は、自主制作ではじめて僕のソロアルバムを作りました。(リーダーをつとめる HARD TO FIND では、3枚アルバムを発表してます。)興味ある人は通信販売しますので直接お電話下さい。それでは!



I AM DULCIMAN / 小松崎 健

KONPEI CD-006 ¥2.500 (税込価格)

お申し込みは、はがきまたはお電話で!

TEL 011-711-7240

〒065 札幌市東区北16条東1丁目

ジャック イン ザ ボックス

(こまつぎけん / HARD TO FIND / 札幌)

## カンテレとろうそくの話 荒 博子



「カンテレ」と聞いて、ああ、あれね、とすぐにおわかりになる方はまだ少ないことでしょう。カンテレは北歐フィンランドやバルト地域に伝わる民族楽器です。あたたかくて冷たい、澄んでくぐもった、響くようで消え入るような音色。なんて書くと、いったいどんなに複雑で精巧な楽器かと思われるかもしれませんが、木の箱に張った弦を指ではじくだけの実に単純な楽器で、これまでに作ってみたいとおっしゃった方も、現物を見るとあまりの単純さに創作意欲をなくしてしまうみたいです。大きさは5弦から36弦くらいまで色々なのですが、伝統的なものは5弦で、それを開放弦で弾きますから、つまり音が5つしかない、ということ。よく、「これで音楽になるの?」と言われてしまうのですが、もちろん、なります。それもけっこう奥の深い音楽に。私などが弾くと、まだ人前では照れもあって、もたついたり指が勝手に走るのをもっともらしくごまかそうとしたりして、しかもごまかしきれないことの方が多くて、つい俗っぽい演奏をしてしまいがちですが(反省)、本来、5弦カンテレは、シンプルで音数が少ないだけに、その中で音楽をつきつめていかざるをえないという宿命を背負った(おおげさ?)楽器で、その奥深さゆえに2000年といわれる歴史を持っているのだらうと思います。もっとも、カンテレを手にしても、音が5つじゃ全然物足りないと思う方もやはりいらっしゃるようで、好きずきだからしょうがないけれどちょっと寂しい気分になります。

ともあれ、ぽつり、ぽつりとたった5つの音を鳴らし続けていると、飽きるどころではなく、これがもう延々と続けられる、というよりも、むしろやめられない状態になってきてしまうから不思議。36弦のカンテレも、もちろん楽しくてずっと弾いていたいけれど、この麻薬的な効果は5弦の方が強いようです。5音に制限された、しんとした音色は、外へ広がるよりは、むしろ内へと向かってくる、それがこの麻薬効果の原因かな、という気

がします。

この、一見単純に思えることがやめられない、という感覚が、何かに似ていると思っていたら、ちょっと唐突かもしれませんが、火を見ているときの感じに似ているんだな、と気がつきました。ろうそくでも暖炉でもたき火でも、火をじっと見ていると時間なんて忘れてしまう、あの感じ。穏やかな興奮。5弦カンテレの音は、たき火というよりはろうそくのあかりでしょう。北歐ではあまり電灯をつけずに、かわりにろうそくをとますという話は、2年前の冬に初めて(かつ今のところ最後に)フィンランドを訪れる前にもよく耳にしていました。がそれが少しも誇張ではなくて、見る限りではどこの家でもそうしていたことは、あらためて新鮮な驚きでした。フィンランドには何か泰然とした人が多い気がするの、そんな長い冬の夜、ろうそくの灯を眺めながら、時間の感覚などなく過ごしているからなのかもしれません。その同じ人たちが、夏になるとまた、沈まない太陽の下で時間を忘れて、散歩をしたり、湖に飛び込んだり、踊ったりバイオリンを弾いたりして過ごすらしいのです。(結局年中、時間なんて忘れていたのかも。)今度はぜひその夏にも訪れてみたいと思っているのですが…。

ところで、フィンランドでは、雪の中に立てられたろうそくがそれはきれいで、雪っていいものだな、と今更のように思ったものでした。春はもうすぐそこ、とはいえ、今年の大雪はまだまだ残りそうですから、もうしばらく、雪の中のろうそくが楽しめることと思います。

(あらひろこ/かけだしカンテレ奏者/札幌)

### 札幌市立高等専門学校

#### 第1回卒業制作展/5年課程修了展

3/14(木)~29(金) 月~金 9:00~18:00

会場/札幌市立高等専門学校 札幌市南区芸術の森1丁目  
TEL.011-592-5400

#### 教員作品展/

#### 5年課程修了展学生作品プレ展示

2/24(土)~3/9(土) 9:00~19:00

会場/札幌市資料館 札幌市中央区大通り西13丁目(大通り公園西端)

### ケント・カールソン来日初個展

3/1(金)~27(水) 10:00~18:00

#### INAXスペース

札幌市中央区南2西2住友生命札幌南2条ビル  
TEL.011-271-1710<休館3/6(水)>

※ヨーテボリ大学芸術学部教授、北海道東海大学芸術工学部客員教授



## 【有機音楽】出来ました 三上敏視

CDを作りました。これからがんばって売ろうと思っているので、いつもの「である」とか「のだ」を使った文にならなくてオカシイ。日本語はいろいろ気を使いますね。

で、なんのCDかという、一応「気功音楽」として作ったものでタイトルは『気舞（きまい）』。たくさんある気功法の中で音楽を必要としているものはあまりないのだけれど、あったほうがやり易いということで音楽を使っている人も多く、指導している人に前から頼まれていたこともあり、今回5曲作りCDにしました。気功に限らず太極拳やヨガなど静かなエクササイズに使えるように一曲の長さを約15分にして、5曲続けてかけて73分というもので、表面的な盛り上がりは抑えて淡々とした音楽ですが、細胞レベルではムラムラと気血が巡るように作ったつもりです。で、タイトルの前にもう一つタイトルがあってそれが『ORGANIC MUSIC #1』。ブライアン・イーノの『AMBIENT MUSIC』シリーズみたいな感じですが、ニューエイジやヒーリングミュージックとは違うのよ、ということで何かいい名前はないかということで思案していたところ思い付いたわけです。実は『妖精時代』という「エルフィン

ランド（札幌の飲み屋）20周年記念」の本（永田さんも参加）にも書いたんですが、今の日本の音楽産業があまりにも偏ったものになっているので、食べもの業界における「有機・自然食品」のネットワークのような存在の音楽もあっていいのではないかとということで「宅配のカatalogに入る音楽ソフト」「生産者を信頼して野菜を年間契約するようにプロデューサーにおまかせして供給される音楽」などを提唱しました。それがなんと一部実現してこのCD、「らでいっしゅぼ〜や」のカatalogに載ることになりました。一般の通信販売のカatalogではCDを扱っているものもありますが、オーガニック系（と、強引に名付けますが）では初めてではないでしょうか。気功をしない人でも日常の中で静かなひと時を過ごすBGMにしたり、軽い瞑想気分になりたい時（これもリビングルーム・

メディテーションと名付けましょう）にかけたりという使い方をしてもらおうというわけです。水や食べ物、化粧品なんかに気を使うなら音楽もオーガニックなものという次第。

で、CDのライナーに師匠と仰ぐ細野晴臣さんにコメントをもらったんですが、これが、さすがは師匠、実に深くオーガニック・ミュージックを語ってくれているので、手前味噌の部分もありますが転載します。

### 有機音楽 [ORGANIC MUSIC]

細野晴臣

現在マスメディアを飛び交うポップミュージックは、際限なく疲労した経済原理の上で危うく成立している。そうではなく、自然界という視野を

持つ有機的な音楽が、世界のあらゆる所から生まれ出していることが重要だ。この20世紀を支えてきた様々なイデオロギーの世代交代の響きを、そこから聴き取ることができる。かつてなく開けた眼、耳そして心の視野はもはや観念を超えて、自然界の塵ひとつぶにまで及んでいるかもしれない。自然の中に生きる自己と、自己の中に生きる自然を見いだす眼が、塵や見えないものを蔑ろにはしないといえる。このような全体感覚は、アンビエン

トといわれる音楽の中にもあるオーガニック〜つまり有機的感覚という、きたるべき21世紀を完全に迎えるための主調となりうるものだ。こうして有機音楽は、たとえ電子的であろうとなかろうと、創り手と聞き手の間に気がめぐることになる。三上敏視さんの『気舞』は、彼がここ数年で見事に気を熟成した音楽だと思う。

CD『気舞』は、郵便振替による通信販売で生産者直売もしています。詳しくは広告をご覧ください。是非ともご購入を。

(みかみとしみ / MICA BOX / 札幌)



有機音楽CD『気舞』好評発売中！  
郵便振替 [02790-1-35292 MICA BOX] CD2,500円+送料400円

## ご対面！！インターネット様 坂井正周

いつか、々、と思い訳もわからずにただやってみたかったというだけのインターネット。思えば昨年春に準備だけとは、高速モデムを用意してその手の本を買いこんだまではよかったが、はて？と予算が結構かかる所までは考えていなかった。もっと簡単に体験できるものと思っていたし、体験してから本格的にやってみようかどうかを決めたかったというのに”これじゃあなあ”という感じで一時保留と相成って、あれからもう一年。その間巷ではますますインターネットブームの如くで、例の馬鹿馬鹿しいウィンドウズブームもインターネットが一役絡んでいたし、三日に一度は新聞記事の中でインターネットという文字が出てくる程の盛況をみせてくれていたが、世の中騒げば騒ぐほどこっちは逆に冷めてゆき、ポストインターネットなる何かとはなんて事まで暇潰しに考え、すっかりひねくれてアマノジャクと化していた最近の事。

使用しているパソコン通信でそのままインターネットに繋がるという願ってもない情報が舞い込んできたので、さっそく接続マニュアルを取り込んでファイルして、久し振りに真剣にマニュアル睨めっこしてセッティングを済ませて、いざインターネット！と意気込んでみたもののMac画面は無常にもエラーメッセージを伝えるだけ………………。何度もマニュアル読み直して再度挑戦しても結果は同じ、困った末の御指示をとパソコン通信を通じて悩み事相談を開いてみたら、ななんとなんと！似たような悩みが1000件以上！！最初の50件位眺めた所でなんか絶望的なため息がでて閉じてしまった。悩みの種類に圧倒されて自分の悩みがなんだかわからなくなって、悩みの原因を知る前に悩みの内容を的確に分析して説明する事がなんだかとても面倒な事に思えてしまって早くも挫折かと、しかしあと一歩で手の届くインターネットなんかかならぬかと思いつつ悶々としていた所、学校のMac担当の先生に何気なく打ち明けたら、職員室にあるMacがインターネットに繋がっているから見ますかあと、目が点になるような後光さすお言葉が返ってきて、たまらずフロッピーディスクにそのままそっくりコピーしてうちのMacに入れてみたら…………… おお！インターネットだ！と思わず興奮の画面でした。

なんと説明していいやらですが、リアルになんかすごくわくわくする世界に入り込むというか多分接続している状態の画面がなかなか美しく、流れ☆なんか沢山飛んでいたりしてなんか妙にそ

の気にさせる演出がされているのが感動的なインターネット第一印象でした。まだまだなにも理解せずただ漠然とインターネットの海を漂う漂流者であって、何処かの無人島(有人島?)に辿り着いては眺めて…………という状態ですが、思ってもみない所に着くのがこれはこれでなかなか楽しい。こないだはどうやら南太平洋のサイトに入ったらしく、ポリネシアンらしき人達や民族道具が延々出てきたし、どういう訳かそこからいきなりMTV(USAの音楽番組)に入ってしまった。インターネットの面白さは、目的のない所に意外性を発見できる所、かな今の所は。

そのうちそれでは満足できなくなるのは目に見えているけど、こんな面白さはやるまで感じていなかっただけに、インターネット体験者が言う所とにかくやってみてという意味が分かったし、体験してみない事にはこの楽しさは説明のしようがないというのも分かった。

これは思えばかつてのMacの良さを人に説明していたのによく似ているなと思う、あの頃まだ今程Macが普及していない頃、その良さを伝えるのとにかく買って触ってみてという抽象的な言い方で、随分Mac教の普及活動をやってた(新興宗教の勧誘とほとんど近いものであった)。パソコン通信を通じてのインターネットは体験としては是非お奨めモノであるが、いかんせん通信速度が遅いため画像受信の待ち時間が長く、結果的に電話回線を長時間占有(平日昼間にやると、終わった後電話が繋がらないという苦情の殺到)してしまうだけではなく、インターネットと戯れている時間がかかり費やされてしまう。そうなることや専用プロバイダーと契約してやるかとなってしまいうしろ、つまり本格的にやろうかというニュアンスに結び付いてゆく事になる。そんなこんなで魅力的であるが同時にリスクもありそうなインターネット、それでも今は真面顔で電話回線をもう一本増やすかなんて、すでにインターネットの病に犯されかけている自分がこわい。

(さかいまさちか／お茶の水設計工房アトリエ 808  
／札幌)



## ■「ポストバブル」

僕は道南の小さな町で高校までをすごしました。長ずるにつれ世界のいろいろなできごとが視野に入ってきたころ（60～70年代）、それらはロックンロールやフォーク系音楽、ヒッピームーブメント、ヴェトナム戦争・・・というようなものが小さな町にもやってくるのですが、「時代はかわる（ディラン）」実感をともなって受け入れていったことを記憶しています。大学を受験しに札幌へ行った時にはちょうど「ウッドストック」が映画館にかかっている、ショッキングで、受験生という立場をわきまえず何遍かみたおぼえがあります。そのときの大人にしてみれば、ちょっとの間の若者特有のビョーキだとされた長髪やルーズな服装を今もひきずっている僕には、かなり被害（！？）甚大なものだったのだと思います。今の若い人の目にはどんなふうに見えるのでしょうか。

ちゅうぶらりんで、詳しく思い出せば恥ずかしい事だらけのその時期、遠くからやってきたそのいろいろなものから得たのは、ファッションばかりでなく音楽や美術、文化一般と言ってもよいかもしれませんが、それらがどこかにあり、享受し楽しむだけというよりも、自分もそれなりに作り手側にまわり作ることで世界に参画することこそ面白い、というようなことではなかったかと思っています。

時を経て、オジサンとかいわれる立場になって廻りの若者を見た時、世の中を憂えてもはじまらないという意味で、近ごろの人は... という気はないにしても、困難な時代状況を体現せざるを得ず、ゴクローサンなことだなあとと思います。勝手なことをと反論（無視？）されそうですが、お互いさまさと考えます。ゴクローサンのひとつは、例えばすごいブームのTVゲーム。隣国から日本の有名国立大学に留学中の知人がぼやくのは、研究室のパソコンでゲームに余念がない学生の姿です。「この人達が世の中のリーダーシップを握る立場＝エリートになると思うとぞっとするよ。」だそうです。たかがゲーム、要するに「ぬりえ」じゃないか、枠組みができ上がっていてそれに色を塗るだけじゃない？そう彼等に悪口をたれても、あっそうという答えしか返ってきそうにありません。若者って既成の枠組みがうっとおしいんじゃないか、そう思っていたつもりでしたが、よくよく考えてみると、それは「ある種の」というべきものでしょう。どうしたって社会の中で計画に対してもしかり）拠点ともなりえます。様々なもの

暮らしして行こうとすればルール＝枠組みは必要なのですが、問題はそれにぶらさがるのか可変なものとして尊重するのかが、社会の成り行きに大きな違いが生じそうなことです。

僕の親世代の必死の努力による高度成長、僕の世代のバブル前後、そしてポストバブルを生きていかざるを得ない若者＝僕の子供たち。生きることを楽しいものにするには、大幅な枠組みの変更は必須と感じられるのですがどうでしょうか？

## ■卒業

このあいだ“O”高校PTAのさる担当の方から、父母向けお便りに載せるので、どんなことでも良いからと原稿依頼があり、書いたのが上の文です。トコロガどういいうわけか内容が編集者のお気に召さなかったらしく、不掲載ドロンの巻となりました。郵送で届いた僕の文のないそのお便りには何のコメントもなく、失礼な、とちょっとカチンときましたが、そんなへんてこりんなことが平然と行われるオトナの世の中なのよ、息子よ。

## ■CAMP

ここトンネル山の行方について、これまで手をつけたことや思いつきをもうすこしまとめてひとつの実体が出来ないかと考えていて、最近見つけたキーワードが「CAMP」。これまでの僕の暮らしはキャンプのようなものだったので、気負って言うまでもないことだけれど、それをもう少し自覚しかつ拡充していくべきということです。

地震後の神戸での復興に向けたいろいろな取り組みのなかで注目したいのが、ティピ・パオなど「ソフトハウス」をセルフビルドする試み。渦中にある人達にはしかられるかもしれないけれど、住まいといえばなんといってもブーフーウーの煉瓦の家という先入観に、あまりに今日の暮らしは拘束されているように見えます。どっちがふさわしいかというよりも、そこまでさかのぼって暮らしあるいは身体をとらえかえす必要を今感じています。動きを作るところからすでに実体。この夏にこのようなことを考えつつ作業もするというワークショップをもくろみ中。またしてもだけれどコノユビトマレ。各人各様の手と考えを持ちよって、やわらかく力強いクウカンを編み出す... というのはどうでしょう。

CAMPの夢をふくらませると、それはまえに言ったガッコウ構想ともリンクするし、いくつかの職場だって可能です。また例えば提案型のプロジェクトを共同で制作する（広大なグリーンをつぶして建設するのだという“ホワイト・ドーム”に対し、なぜ対抗案が発表されないのか？札幌都心の再開発の複合体でありながら、物理的な場所性を越え、それこそ星雲的コミュニティの雫のひとつ



つとしてこの山が機能するのなら、楽しいことです。

### ■開拓団

今年どうするのか叩き台を出すという約束を前回したんだけど、今だ大雪の下、土をいじる実感がなかなか湧いてこない。おおざっぱには昨年手をつけた所の若干の拡大。クマザサを刈り樹木もちょっと伐採し畑への日照の確保をする必要があると思います。興味がある人には羊の放牧場の整備あり。これもクマザサ刈りと樹木の整理がメイン、加えて牧草の種まきなど。汗を流すばかりじゃ...なので、山のとっぺんに露天五右衛門風呂ってのはどう？(どっかに釜が寝てないでしょうか?)「満月風呂」とか称したヌーディストクラブ...うわ!

4月はじめに作付け、道具準備などを話し合う集まりを持ちたいと思います。どうぞご連絡。よろしく。

### ■3年目の「工房だより」にどうぞご参加を

すたこらやってきましたが今号で2年目を終了。次の9605号から3年目に入ります。読者の方々へは振り込み用紙を同封させていただきました。よかったらまたつきあってください。できたら記事をいただけるといいなと思っています。(96年度「工房だより」は5月号～翌年3月号の隔月刊、計6号分送料込み¥1,500です。)

今のところ当方が個人的に編集発行しているわけですが、出会う人に誰彼となく「ねえ、やんない?ゴロニヤン」と袖を引っぱってみても、ワルイビョーキとでも感じるのか、バトンタッチあるいは共同発行の体制にならず、しゃあないなと娯楽の少ない山暮らしの楽しみとして独占しております。デモアキラメナイゾ。現在、500部弱を配っています。編集はコンピューターでさっさと出来ますが(質は!?)それを「紙飛礫」にして送るという作業がタイヘン。手持ちのコピー機は「モウダマサレナイゾ」とあえなくパンク。前号よりオフィス・イメージにプリントを外注しています。紙を使った情報流通や郵政省へのご奉仕について再考する機会です。Fax.、e-mailなどとの併用も近いうちにすべきかなと考え中。InternetのHomepageもかな...

### ■編集後記ふろく／永田温子

ある日突然見つけてびっくりすることって時々ある。3月3日は、チャボの小屋でころころと転がっている小さなたまごに、「アッ!」。もう産んでたんだ。きょうはマイナス4度だったけれど、日が長くなっていたもんね。いつの間にやら、「成鳥」していたんだね。ダンボールの箱に、荷作り用のカサコソを入れて置いてやりました。きょう見た映画“DEAD MAN”の、目を見ひらいたまま死に向

かっていっているという物語が余りにも暗示的で、チャボの成鳥をほほえましく思う気持ちと何かアンバランスな感じだけれど、これがものごとの裏表か。

### 4つのD～次元～＜金属へのアクセス＞

参加作家：小林重美、沢田正文、丸山隆、渡辺信

3/7(木)～17(日) 休館日3/11(月)

北海道近代美術館

札幌市中央区北1条西17丁目 TEL.011-644-6881

### 藤森かつお GIG VOL. 1

3/10(日) OPEN 19:00 START 19:30

¥2,000 (with 1 drink)

BOOGIE

札幌市中央区南3西4坪川ビル1F TEL.011-251-7547

(財) スウェーデン交流センター・木工工房

スウェーデン木工作家・「カルチャー・ワーカー」

アンデシュ・オルソン個展

SCFセンターホール

3/16(土)～5/16(木)

(10:00～16:00・月曜日休館)

オープニングパーティ

3/16(土) 17:00より

(申込は3/14まで)

会場：スウェーデン交流センター

石狩郡当別町スウェーデンヒルズ

V-2-3-1

TEL. 01332-6-2360 / 01332-6-2992

交通：学園都市線、石狩太美駅下車

(札幌駅より約40分)

送迎バス乗り換え。送迎バスの時刻

をご確認ください。

(注) アンデシュさんは3月に帰国されます。



### 鈴木順三郎 彫刻展／鉄の球宴

3/28(木)～4/2(火) 11:00～19:00

アトスペース 201

札幌市中央区南2西1山口ビル5F、D室

TEL.011-251-1418

●パフォーマンス (会費¥1,000)

3/30(土) 18:00～泰かのか、ミニマムライン他